

木下娘槻遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1975

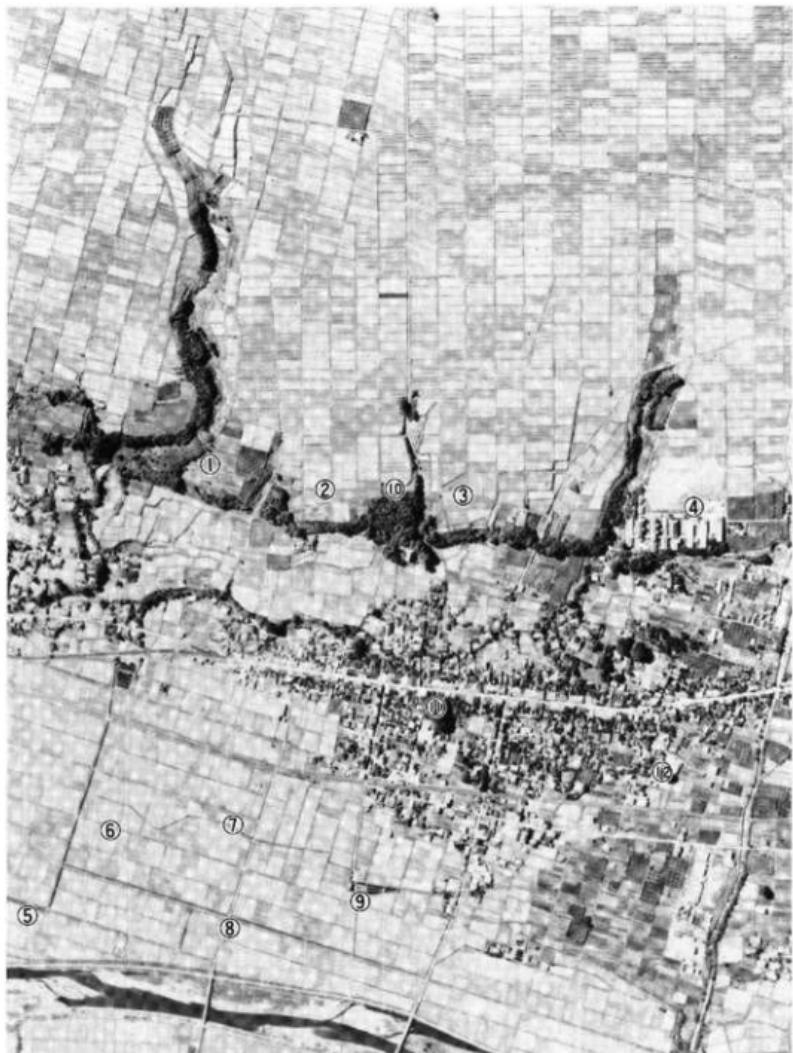
箕輪町教育委員会

木下猿樂遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1975

箕輪町教育委員会



- ① 猿 楽 遺 跡 ② 南 城 遺 跡 ③ 北 城 遺 跡 ④ 上 の 林 遺 跡
⑤ 曾 根 田 遺 跡 ⑥ 渋 田 遺 跡 ⑦ 穴 田 遺 跡 ⑧ 小 清 水 遺 跡
⑨ 大 清 水 遺 跡 ⑩ 笈 輪 城 跡 ⑪ 南 宮 神 社 ⑫ 芝 宮 の け や 木

序

猿楽地籍は木下区の南端で、南箕輪村久保区に接する段丘上にあり、北城・南城遺跡の南に連なる舌状台地を占めている。

既に発掘を終了した北城遺跡から弥生期・中世期の住居址を多数発掘したことから、同様の条件を備えているこの地籍の発掘が期待されるところでもあり、更に猿楽・天王・后洞などの小字と隣接していることから中世の遺跡としての関連も考えられる地籍に属している。現に予備調査でも繩文・土師・須恵器破片が表面採集によって沢山見られたところである。

今回箕輪町開発公社がこの地籍の住宅開発を行うに当り、文化財保護の立場からこの発掘のために巨額の出費を厭わなかった深い御理解に対して厚く感謝申上げると共に、発掘に際しては調査団長友野良一先生をはじめ、堀口・小川・市川・白鳥・小池・柴の各調査員の献身的な調査と、伊那北高等学校歴史研究クラブの生徒諸君の協力により所期の目的を達することができ、ここに調査報告書の刊行を見るに至ったことは欣快に堪えない。

昭和50年9月

箕輪町教育長 河手貞則

凡　　例

1. この調査は、笑輪町開発公社の行なう事業前に終了する計画のため緊急の記録保存事業とした。
2. 報告書は、図版を主体として文章記述は簡略とし、又調査の主眼は弥生時代の遺構の究明に重点を置いた。資料の再検討は、後日の機会にゆすることにした。
3. 本報告書の執筆および図版作製は、次の通りである。担当した項目の末尾に執筆者を明記しその責任を明らかにした。

本文執筆者 友野良一、堀口貞幸、小池政美、柴登巳夫、北原宣明、藤森洋子 (順不同)

図版製作者

- ・遺構及び地形実測図 柴登巳夫、藤森洋子、荻原 茂、小池幸夫
- ・土器拓影 小池政美、柴登巳夫、荻原 茂
- ・土器及び石器実測図 柴登巳夫、藤森洋子

写真撮影

- ・発掘及び遺物 友野良一、小林恭治、柴登巳夫、藤森洋子

4. 本報告書の編集は主として、笑輪町教育委員会があたった。

目 次

序 文

凡 例

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 環 境 (1 ~ 5)

 第1節 位 置 (1)

 第2節 遺跡の自然環境 (2)

 第3節 歴 史 的 環 境 (3 ~ 5)

第Ⅱ章 発掘調査の経過 (6 ~ 9)

 第1節 発掘調査に至るまで (6 ~ 7)

 第2節 発掘日誌 (7 ~ 9)

第Ⅲ章 造 壕 (9 ~ 14)

 第1節 住居址 (9 ~ 13)

 第2節 建造物址 (13 ~ 14)

 第3節 土 壤 (14)

第Ⅳ章 造 物 (15 ~ 18)

 第1節 土 器 (15 ~ 17)

 第2節 石 器 (17 ~ 18)

 第3節 中近世時代の遺物 (18)

第Ⅴ章 所 見 (19 ~ 20)

挿図目次

第1図 位 置 図	(1)
第2図 集落遺跡分布図	(4)
第3図 地形図、発掘区域図	(9)
第4図 遺構配置図	(10)
第5図 第1号住居址実測図	(11)
第6図 地層断面図	(11)
第7図 第2号住居址実測図	(12)
第8図 第3号住居址実測図	(12)
第9図 地層断面図	(13)
第10図 柱穴址実測図	(13)
第11図 土 壤 実 測 図	(14)
第12図 土 器 実 測 図	(15)
第13図 土 器 拓 影	(16)
第14図 石 器 実 測 図	(17)

図版目次

図版 1 遺 跡 全 景
図版 2 遺 構 (遺構全景、第1号住居址)
図版 3 遺 構 (第2号住居址、第3号住居址)
図版 4 遺構、遺物出土状況 (柱穴址)
図版 5 遺物出土状況 (土 器)
図版 6 遺物出土状況及び記念撮影
図版 7 遺 物 (出土陶磁器(その1))
図版 8 遺 物 (出土陶磁器(その2))
図版 9 遺 物 (出土陶磁器(その3))

第Ⅰ章 環 境

第1節 位 置

猿樂遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪字猿樂13,913番地及び13,918番に所在する。箕輪町の南端に位置し、南側の洞（油ヶ沢）を境に南箕輪村に接している。国鉄飯田線木下駅を下車して、西南の方向に木下の市街地を抜け、国道153号線を横断して町道46号線を木下駅から遡ること750mの東向き高台上にある。

標高は、おおよそ700mで眼下を流れる天竜川との比高は約35mを計る。 (北原宣明)



第1図 位 置 図

第2節 遺跡の自然環境

諏訪湖に端を発する天竜川は、伊那の平を形成し、箕輪町を東西に二分するように南流している。遺跡周辺を特色づける地形は、扇状地と河岸段丘である。

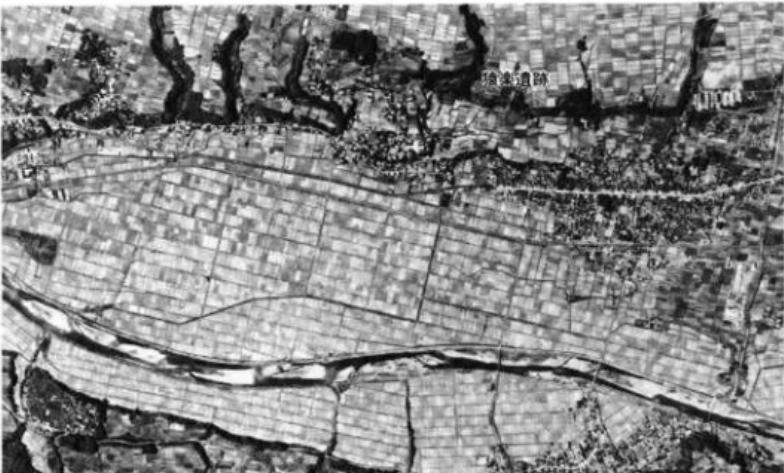
天竜川西岸に発達した雄大な扇状地は、天竜川に流れ込む中小河川によって形成されたものである。なかでも最も流路の長い大泉川と黒沢山を源として流れる帶無川によって形成された大泉扇状地上に猿楽遺跡は位置している。

遺跡に立って東方を見ると段丘下に天竜川とその氾濫原、それに続く小河川によってできた斜面の急な小扇状地、その背後に赤石の山脈を経て、はるかにそびえる雄大な南アルプスの麗峰を見渡すことができる。西に目を転すれば、傾斜角3度から4度の緩やかな扇状平坦地が経ヶ岳山塊の山麓まで約5kmの間続いている。

天竜川西側の段丘崖下には豊富な湧水が出ている。この段丘下の湧水群は、今日でも水道水として重要な水源である。猿楽遺跡もその湧水を伴う段丘上先端に位置する遺跡である。

遺跡の南側は、南箕輪村との境をなす油ヶ沢によって小規模な沢を形成し、わずかに流れを見ることができる。この段丘崖下の湧水と沢の水は、生活に欠くことのできないことは当然であり、西側に続く平坦な草原、森林地帯は、動植物の成生息地であり、段丘下に開ける広大な氾濫原の肥沃な低湿地帯は、稲作には絶好の生産の場であったにちがいない。又天竜川での魚類も忘れてはならない食糧源であったであろう。

このように遺跡は、地形的・自然的条件を備えた絶好の居住地であったと思われる。(柴、北原)



第3節 歴史的環境

河岸段丘と数多い扇状地とが獨得の地形を作りだし、絶好の居住性をもつこの地一帯は遺跡分布の密な地域である。

箕輪町内は先史より近世に至るまでの歴史上の遺跡に富み、その总数は150ヵ所を越し、上伊那郡内でも屈指の遺跡地帯といわれている。町内の遺跡を立地する条件により分類すると次の4つに分けることができる。

第1類 経ヶ岳山塊の山麓附近に立地する遺跡群。

第2類 天竜川西岸の段丘上に列状に並ぶ遺跡群。

第3類 天竜川東岸の段丘上及び扇状地、扇状台地に立地する遺跡群。

第4類 低位段丘（沖積段丘）の遺跡

猿楽遺跡は第2類の遺跡群の一つである。猿楽遺跡の属する第2類とそれに関係をもつ第4類の遺跡群について考察してみる。天竜川の西岸段丘先端部には、ほとんど切目なく南北に列状をなして遺跡が並んでいる。猿楽遺跡の北方約400mの地に南城遺跡（2図2番）がある。この遺跡は西天竜かんかい用水路の開通に伴う土地改良工事の際に発見された弥生、土師、灰釉まで出土する複合遺跡で、今日でも遺物が数多く採集できる。この遺跡と洞一つ隔てて北接するのが北城遺跡（2図3番）であり、第2類中最大の規模を持っていると思われる。昭和46年、長野県企業局の分譲住宅団地造成事業に伴い緊急発掘調査され、縄文後期から平安時代にまで至る複合遺跡であることが判明した。この発掘調査において弥生時代後期の大集落の一部とみられる23戸の堅穴住居址と20基余の火葬墓群が検出され、遺物中には青銅製香炉の出土もあり注目される遺跡である。もう一つの洞を越えると県立箕輪工業高等学校のある上の林遺跡に至る。この遺跡は縄文中期の遺物を多量に出土する地で同校建設の際、又、校庭拡張工事等によって何ヵ所かの住居址も発見されている。このように段丘先端部には遺跡が続き、帝無川を過ぎると藤山（2図6番）中山（2図7番）などの遺跡が並ぶ。天竜川と支流深沢川の合流点に接した段丘上に、全長60m、後円部直径30m、高さ10.6m、前方部の幅46m、高さ11.5mの規模を有する上伊那地方唯一の前方後円墳、松島王墓（2図9番）がある。前方部が後円部よりやや高く、中央のくびれ部の左右に丸い造り出しが付けられておりこの点県下で唯一の車塚形式の古墳として知られている。周囲に塚をめぐらし、東北のやや離れた地点に一基の陪塚を伴っているが、以前においては、他にも陪塚が存在したといわれている。

次に南接している南箕輪村の遺跡群に目を移すと、やはり多数の遺跡が存在している。油ヶ沢を越えると南垣外、丸山、天王森、上人塚、垣外、天伯遺跡は昭和42年の土地改良工事に伴う緊急発掘調査によって、縄文中期から平安時代にまでの大複合遺跡であることが確認されている。天伯遺跡に続いて、向垣外、西垣外、北垣外などの遺跡を経て、その南には昭和33年の発掘調査によって、ローム層内から発見された槍先型尖頭器をはじめとする50余点の石器類が出土した神子柴遺跡がある。

次に低位段丘（沖積段丘）の遺跡に目をやると、天竜川氾濫原上に在る代表的遺跡としては、

箕輪遺跡を上げなければならない。猿樂遺跡の東方下に在り、遺跡に立つと箕輪遺跡一帯を一望できる。箕輪遺跡は飯田線木下駅東方及び東南方の、久保下、苦谷、馬場、御室田、鐵治屋堀外及び大清水などの地籍から南箕輪村塙ノ井地籍までの広範囲に及ぶ大遺跡である。昭和27年から



- ①猿樂 ②南城 ③北城 ④大清水 ⑤上の林 ⑥藤山 ⑦中山
- ⑧並木下 ⑨王墓古墳 ⑩大出 ⑪五輪 ⑫一の宮 ⑬山の神 ⑭向堀外
- ⑮天伯 ⑯上人塚 ⑰堀外 ⑱内城 ⑲大泉 ⑳宮ノ上 ㉑大原
- ㉒北堀外 ㉓矢田尻 ㉔上金 ㉕福島 ㉖上の山 ㉗御室田 ㉘馬場
- ㉙苦谷 ㉚久保下 ㉛番場原 ㉜高室古墳 ㉝櫻烟高根 ㉞久保畠 ㉟中曾根

第2図 集辺遺跡分布図

施行された土地改良工事によって、当該地籍から縄文後期から弥生時代中・後期及び平安時代にまで至る多量の遺物が出土した。なかでも注目されたのは、丸木舟、木製櫂、田下駄、木製人形、木製農耕具、木器類、更には延長4,000m余、数量にして数万本に達するといわれた木枕の多量出土であった。残念なことに、学術的発掘調査がまだ行なわれていないが、古代水田址の存在を証拠づける遺跡であり、段丘上にある遺跡群、特に王墓をはじめとする古墳群との関係等、今後の研究調査に大きな期待の持たれる遺跡である。

猿楽遺跡をとりまく遺跡の概要は以上のようにあるが、これ等の遺跡を中心とした弥生文化の発展と生産の拡大は、王墓に代表される次の古墳文化へと移行していくのである。（北原・榮）

第II章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

猿楽地籍は段丘上突端に位置する農地地帯（畠地及び水田）であったが、箕輪町開発公社が、当該地籍約8300m²を用地買取し、20区画よりなる分譲宅地開発を昭和49年度事業として計画、5月中旬から造成工事に着手することになった。

このため箕輪町教育委員会は、猿楽遺跡が信濃史料等にもその存在を記録された遺跡であることから、現地調査の結果、箕輪町開発公社と協議し、日本考古学协会会员友野良一氏を調査団長とする調査団を結成し、5月上旬に記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施する運びとなった。

イ. 調査受託面積 650m²

ロ. 委託契約期間 昭和49年5月1日～昭和50年10月31日

ハ. 発掘調査日程 10日間

ニ. 調査団

団長 友野 良一 日本考古学协会会员

調査主任 榎 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任

調査員 堀口 貞幸 長野県考古学会会员・伊那北高等学校教諭

〃 小川 守人 箕輪町文化財調査委員

〃 白鳥 伝 〃

〃 市川 修三 箕輪町文化財調査委員・箕輪西小学校教諭

〃 小池 政美 長野県考古学会会员

〃 唐沢 千洋 箕輪町役場職員

〃 北原 宣明 〃

調査補助員 矢島 伝三郎 箕輪町教育委員会教育委員長

〃 唐沢 義美 箕輪町教育委員会教育委員長職務代理

〃 白鳥 弘 箕輪町教育委員会教育委員

〃 馬場 晴一 〃

〃 春日 琢爾 箕輪町文化財調査委員会委員長

〃 稲口 彦雄 箕輪町文化財調査委員

〃 萩原 貞利 〃

〃 星野 和美 〃

〃 矢沢喬治 〃

〃 唐沢作衛 箕輪町文化財調査委員 町議会議員

調査補助員 藤森千萬喜 箕輪町文化財調査委員・町議会議員
〃 小林重男 箕輪町教育委員会社会教育指導員
事務局 河手貞則 箕輪町教育委員会教育長
〃 唐沢保美 箕輪町教育委員会教育課長
〃 小林恭治 箕輪町教育委員会社会教育主事
〃 中村由美子 箕輪町教育委員会主事
〃 柴登巳夫 箕輪町郷土博物館主任
〃 藤森洋子 箕輪町郷土博物館学芸員

調査協力者

矢沢篤、北原明(伊那北高校教諭)、小池幸夫、石沢真一、春日博、浦野正、小町谷章
守田厚、松井覚、宮下進、中島達朗、荻原茂、木下久、伊東修一、小林健、高坂良弘
小川光弘、池田健彦、中村博俊、小松雅人、織井崇、中村調、林裕秀、小島農彦
戸田路子、内藤睦夫、大槻隆一、北原文徳、平松直樹、宇野勝

第2節 発掘日誌

5月2日(木) 晴 午後からのブルトーザーによる排土作業前に表面採集を行なう。土製紡錘車一個、打製石斧一個、その他弥生式土器、中世陶器の小破片を採集する。午後3時ブルトーザーによる排土を始める。約2時間の作業で600m²余りを平均30cmの深さに排土を行なう。直ちにグリットの設定をする。南北に北から2m間隔でAからWまでの23字のアルファベットで、東西に東から1~8までを付し、2m正方形の154グリットを設定して杭打ちをする。東西14m、南北44m約600余m²の調査区域である。Kグリットから北側をA調査区、南をB調査区とした。

事務局 2名

5月3日(金) 晴 午前8時30分現地集合。結団式。

河手教育長、友野調

査団長、春日文化財調査委員会長よりあいさつがあり、柴調査主任から、諸説明、注意事項伝達後、発掘調査を開始する。午前中A調査区の排土作業を進めながら遺構の発見に努める。A₃グリットを中心とする位置、G₃グリ



発掘風景

ットを中心とする位置の2ヵ所に落ち込みが確認される。ほぼ方形をしており住居址と思われる。午後は、全員B調査区に移動、遺構の発見作業を行なう。西寄りMNグリットを中心に落ち込みを確認すると共に、B地区南東部一面(6~7列)にピット状の遺構を発見する。作業終了17時全員集合して、団長より本日の成果及び発掘に対する注意事項を聞く。

調査員 7名、調査補助員 4名、事務局 4名、作業員 17名

5月4日(土) 晴

第1日目の作業により発見された3ヵ所の住居址と思われる遺構を中心に作業続行、作業の進むにつれて住居址であることは、ほぼ間違いないし、A₃グリットを中心とするものを第1号住居址、G₃グリットを中心とするものを第2号住居址、西寄



発掘風景

りMNグリットの所のものを第3号住居址とする。落ち込みの中央部に、十字状にベルト地帯(幅20cm)を残して地層断面の実測に備える。B調査区のピット群は、午後からの作業が進行するに伴い数を増し、ほぼB地区全体に及んでいる。第3号住居址は、プランの多くが発掘調査区域外に出ているため、一部を拡張して作業を続行する。各住居址共に土器の出土が見られるがいずれも星は少ない。第2号住居址床面5cm程上に打製有肩石斧が出土する。夕方までには、各住居址共にプランがはっきりする。作業終了時に全員の記念撮影。

調査員 8名、調査補助員 2名、事務局 4名、作業員 26名

5月5日(日) 晴・にわか雨 各住居址共に十字状に設けたベルトによる地層断面の実測と写真撮影を行なう。午後3時頃までは3住居址ともにベルトも取除き完振。いずれも4柱穴を有し(第3号住居址は1柱穴を確認できず)隅丸長方形のプランである。出土遺物は、第3号住居址が一番多く、第2号住居址が少ない。各住居址の埋甕炉の掘り上げを行なう。第一号住居址のものは、底部を欠いた無紋の弥生式土器の甕で正立である。第2号住居址のものは、鉢形でこれも底部をわずかに欠き正立して口縁部は、床面と同一平面上にある。この埋甕炉からわずか西側に2個体分の片が出土する。そのためか焼土の範囲がかなり広い。第3号住居址のものも第1号住居址と同じような状態である。3住居址共に東壁寄り中央部に正立の埋甕炉である。

調査員 7名、調査補助員 1名、事務局 2名、作業員 8名

5月6日(月) 晴 B調査区のピット群の掘り上げを行なう。作業進行状況により清掃、写真撮影、実測を行なう。第3号住居址とピット群との間に位置する所に土壤と思われる落ち込みの掘り上げ作業を行なうが、伴出遺物もなく、どのような遺構か判明できず、午後から第1号住居

址と第2号住居址のそれぞれの西側に壁から50cm～1m離れて南北に一列のピットが現われる。住居址に直結するものと思われる。B調査区のピット群は、最終的には総数130を越す。ほぼ南北に一列をなし9～10列になっている。

調査員 5名、調査補助員 2名、事務局 3名、作業員 4名

5月7日(火) 晴 第3号住居址の南壁寄りに土壤と思われる落ち込みがあったが、伴出遺物もなく調査してみてもどのような遺構かはっきりしないが、土壤であろうと思う。午後から各住居址の実測作業を行なう。 調査員 1名、調査補助員 2名、事務局 1名

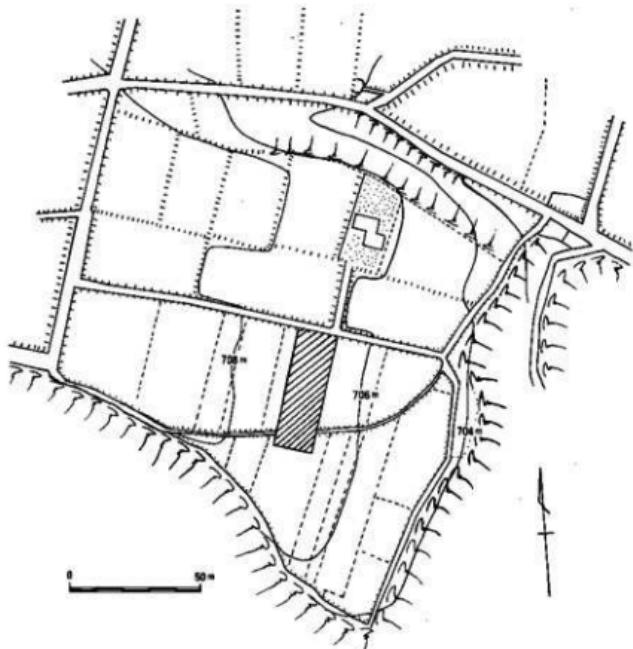
5月8日(水) 晴 遺構の全測作業、本日で作業のすべてを終りとする。

調査員 1名、事務局 1名

延べ人員

調査員 29工 調査補助員 11工 事務局 15工 作業員 55工 総計 110工 (藤森洋子)

第三章 遺構



第3図 地形図(発掘区域図)

第1節 住居址

第1号住居址 (第5図、図版2)

発掘調査区域の北端A・B 2~4グリットを中心に発見された。主軸方向はN 60°Wである。ローム層を掘り込んで構築し、表土より床面までは平均1mと深い。

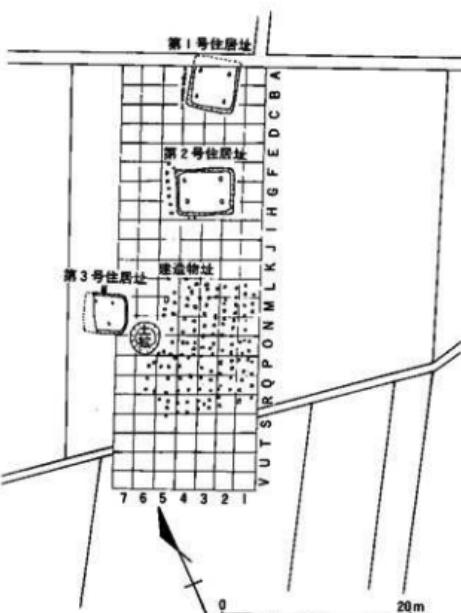
プランは東西5.3m、南北4.8m(推定)の隅丸長方形をなしている。主柱穴はP₁~P₄でいずれも南北に長い小判状をしている。P₁とP₂、P₃とP₄の間隔は2.7m、P₂とP₃、P₁とP₄の間隔は2.8mを計る。

深さはR₁19cm、R₂48cm、R₃16cm、R₄21cmで直穴のR₂が極端に深い。その他住居址内には20余ヵ所のピットが確認されたが、ほぼ中央に位置する6ヵ所については、多少の規則性が認められる。西壁外50cmから60cmに円形、不整円形の13ヵ所よりもなるピット列が検出された。(この例は第2号住居址にも同じ状態のピット列とが出来ている。)住居補強用の柱穴址であろうか。

床面は堅固なタタキで多少の凹凸はあるがほぼ平面である。壁は約70度前後の斜壁で、壁高は落込み確認面より40cmから50cmを計る。

伴出遺物はいずれも後期弥生式土器であり、東北の隅から完形で出土した小壺と、口縁部と底部を一部欠いた正立の埋甕炉の出土を見る。

(柴登巳夫)



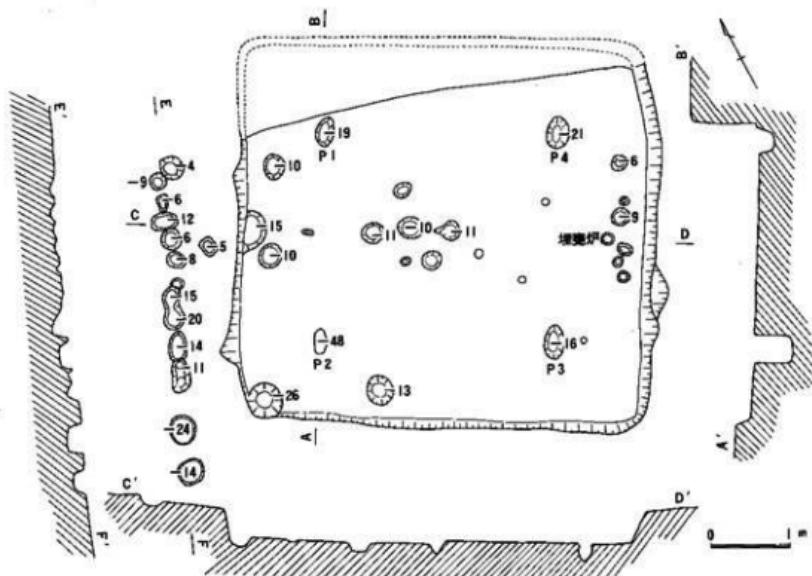
第4図 遺構配置図

第2号住居址 (第7図、図版3)

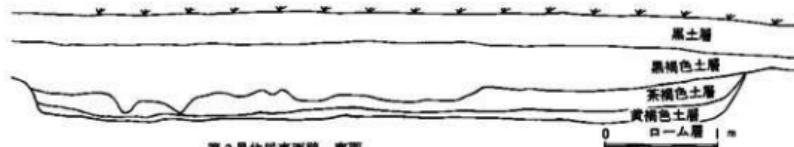
A調査地区中央部、G 3、4グリットを中心として検出された。第1号住居址から南へ6m寄ったところに検出され、調査地区内に入ったので完掘することができた。主軸方向はN 75W°である。プランは東西6.3m、南北5.2mの隅丸長方形である。主柱穴はP₁からP₄でいずれも南北に長い小判形をしている。(第1号住居址の主柱穴と同形)主柱穴の深さはそれぞれR₁23cm、R₂41cm、R₃30cm、R₄19cmである。主柱穴間の間隔はP₁とP₂、P₃とP₄はいずれも2.5m、又P₂とP₃、P₁とP₄はいずれも3.8mを計る。第1号住居址と同じく、西壁外に壁と平行してピット列が検出されている円形もしくは楕円形をしており、深さは12cmから21cmである。(第1号住居址のものと同様住居の補強用柱穴列と推定)壁は平均して60度前後の斜壁で、壁高は落込み確認面より35cm程度である。

床面は基盤になるローム層を掘り込み表土から90cm前後で、多少の凹凸はあるがしっかりとしたタタキになっており平らである。伴出遺物の土器として中央東壁寄りに東西に列状に出土した3個の埋甕炉が主なものである。もっとも東壁寄りに出土したものは鉢型でわずかに底部に欠く。(第7図、図版6)前述した土器の西側にそれぞれ10cmの間隔をおいて、他の2個が出土している。2個共に3割程度の破片状であるが、3個の埋甕炉を次々使用したものと思われる。

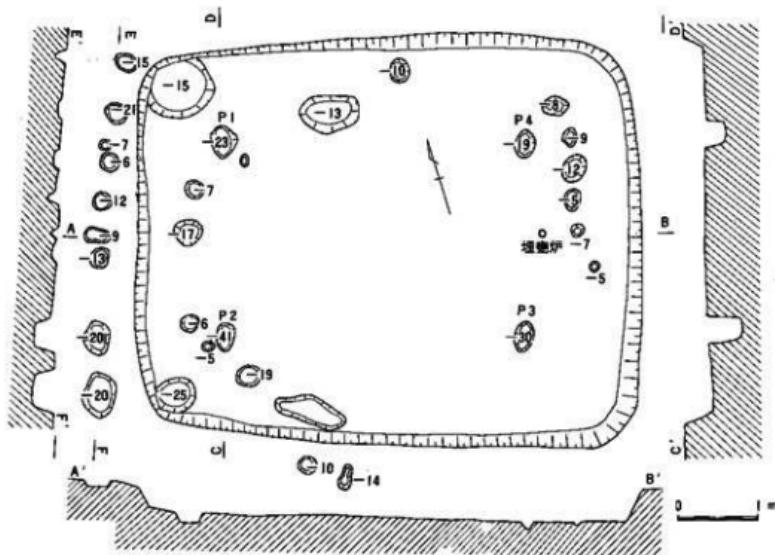
住居址中央部床面上から砂岩の打製有肩石斧(第14図、図版4)も出土している。(柴登巳夫)



第5図 第1号住居址実測図



第6図 地層断面図(第2号住居址南壁)

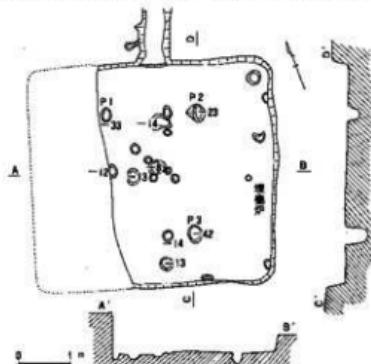


第7図 第2号住居址実測図

第3号住居址（第8図、図版3）

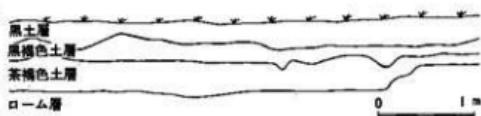
B調査区西寄りMN 7グリットにおいて発見された。住居址の50%近くが調査地区外のため全貌を明らかにすることはできなかった。プランは東西4.7m(推定)南北4.1mの隅丸の方形をなしていると思われる。主柱穴はP₁、P₂、P₃が確認され、深さはP₁33cm、P₂23cm、P₃42cmで、形状はいずれも南北に長い小判型をしている。

柱穴間隔はP₁とP₂間が1.8m、P₂とP₃間が2.4mを計る。壁は75度の斜壁であり、第1、2号住居址に比べやや急な角度になっている。壁高は落込み確認面より35cmで良好な壁である。北壁中央部に北に伸びる溝状の落込みが検出されたが、住居址との関係ははっきりしない。床面は地表下80cm程度のところにローム層を掘り込んで作られている。第1、2号住居址に比べると凹凸がかなり目立つが堅固なタタキ床で全体的



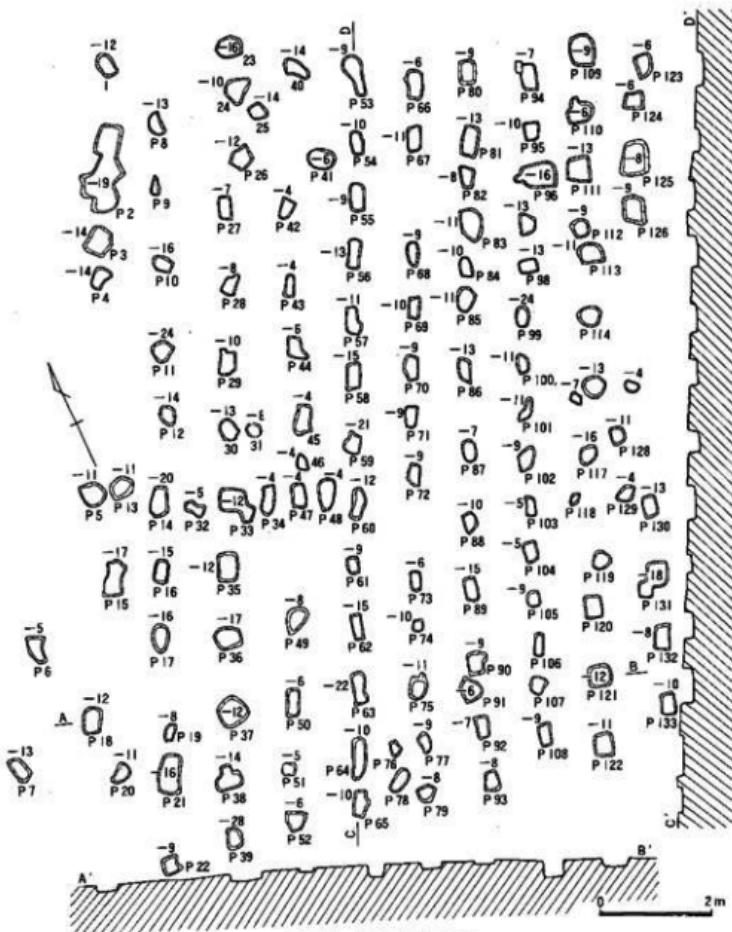
第8図 第3号住居址実測図

には平面である。中央東壁寄りに口縁部と底部の一部を欠く埋甕炉が正立して出土している。3個の住居址中では土器片の出土は一番多い。(柴登巳夫)



第9図 地層断面図（第3号住居址西壁）

第2節 柱穴址 (第10図、図版4)



第10図 柱穴址実測図

柱穴址、本柱穴址の発見された場所は、猿樂遺跡でもやや南西寄りの位置に当る。その規模は東西13.5m、南北17.5m、面積は236m²である。

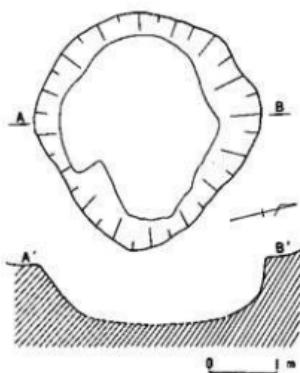
地面は東北に3度の傾く緩やかな傾斜地である。上層は黒色土が30cm~40cmで、その下は黒褐色土層が10~15cmあり、ローム層に達す。柱穴はこのローム層に掘り込み作られたものである。柱穴の配列方向は、東に23度31分偏した角度で並列している。柱穴は形状は、方形、長方形、隋円形、円形、不整円形、瓢箪形等が主な形状である。主な柱穴の大きさは、方形でP₂₂、35×38cm、深さ11cm、長方形P₁₈、25×48cm、深さ12cm、隋円形、P₁₁、36×50cm、深さ6cm、円形では、P₁₈、40×40cm、深さ13cm、不整円形、P₁₁、38×42cm、深さ16cm、瓢箪形ではP₁₃₁、35×86cm、深さ10cm等が代表的なものである。なお、深さは、ローム層に掘り込まれた面で記録した。また、柱穴の底部は一様に平らであったことは、柱穴の性格上きわめて重要な意味をもつものと思われる。

柱穴址の周辺の調査が完全ではないので、柱穴址に関係する遺構との関連を知ることができなかつたことは、本址の性格を完全にすることができなかつたことを意味するものである。遺物は覆土中から出土したものが大多数で、柱穴址よりは一、二検出されたに過ぎなかつた。(友野良一)

第3節 土 壤 (第11図)

B調査区北西寄り、第3号住居址の南に検出されたもので、直径南北3.3m、東西3.5mの不正隋円形をしている。深さは90cm程度で、覆土は黒色土で砂礫をわずかに含んでいる。調査最終日に掘り上げを行なったが完掘できず、又伴出遺物もなく、遺構も不安定で土壤であろうと思われるが、結論を出すまでは至らない。

(柴登巳夫)



第11図 土 壤 実 測 図

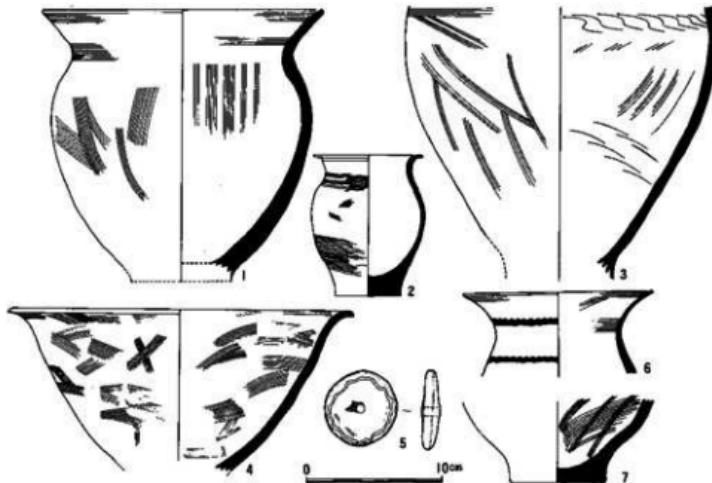
第IV章 遺物

第1節 土器 (第12図、図版5)

第12図(1)は第1号住居址の埋甕炉にあったもので、正位の状態で出土した。胴部後半から底部にかけて欠損しているが、全般的には壺形土器に属している。形態は口縁部の立ち上がりは(5)に比較してゆるく、厚さは口縁部附近で肥厚気味であった。文様は大部分が無文であるが、ところどころに櫛描きの細線が引かれている。その描写の仕方は表裏とも口縁部は横位に、胴部では表側はゆるやかな弧状に、内側は縱位になっている。色調は赤褐色で、胎土に雲母、長石を含み、焼成は良好である。

第12図(2)の土器は、第1号住居址の床面直上に出土した小型壺形土器である。器形は口縁部がやや漏斗状に開き、胴部は小肥り状に張っている。胴部は中央部には文様がなく、口縁部と底部に数条にわたって乱れた櫛描波状文が横走している。色調は黒褐色を呈し、胎土に少量の雲母を含み、焼成は良好である。なお、外面に多くの炭化物が附着している。

第12図(3)は、第3号住居址の埋甕炉であり、口縁部と底部は欠損してしまって、胴部だけが残っているが、胴部のふくらみ状態より、壺形土器となるであろう。文様は質素で櫛描の沈線が口縁部には横位に、胴部ではゆるやかな弧状に描き出されている。内面文様は外面文様と大差はないが、上部に蛇行状の沈線が横走している。色調は赤褐色を呈し、胎土に少量の雲母を含み、焼成



第12図 土器実測図

は良好である。

(4)は、第2号住居址の埋廻炉の状態で発見された土器で、器形は、浅鉢形に含まれていると思われる。器形は口縁部が大きく、下り気味を呈している。底部は欠損しているが、断面図のカーブから予測して平底を呈していると思われる。文様は表裏面ともに数条にわたって櫛描沈線文が弧状、斜線状、交叉状に表現されている。色調は赤褐色を呈し、焼成は極めて良好で胎土中に多量の雲母を含んでいる。

(5)は、第3号住居址の埋廻炉に正位の状況で出土したもので、胴部以下は欠損しているが、推定するに、下へいくほど胴張りになり底部へいくにしたがってつぼまり、平底を呈する壺形土器であると考えられる。現存する器形は、口縁部が大きく漏斗状に開いている。文様は三種類に分けられる。上部文様帶は、口唇部近くにあり、沈線が数条横位。中部文様帶は口頭部に存し、横位波状文。下部文様帶は胴部上位に数条にわたって櫛描き波状文が横位にそれぞれ施されている。色調は黒褐色を呈し、胎土に少量の雲母を含み、焼成は中位である。

(6)は、第3号住居址の覆土下層より出土したもので、底部だけが残存しているが、壺形土器と思われる。内面に櫛描沈線文が雑然と施されている。色調は赤黄褐色を呈し、胎土に多量の雲母を含み、焼成は良好である。

紡錘車 (第12図(5))

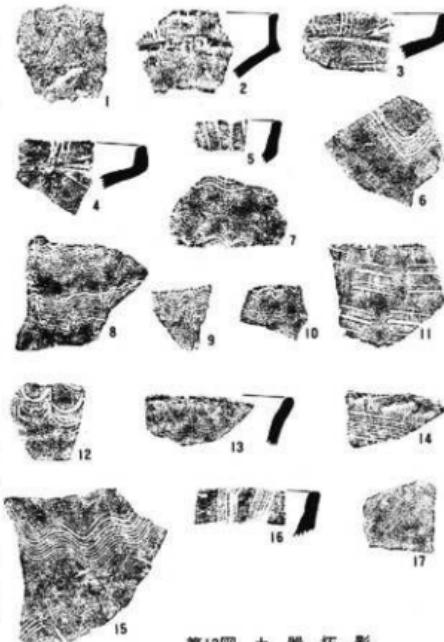
発掘調査区域を表面採集中に発見されたものである。直径5.5cm、最大厚さ1.4cmの円形で、中央部に直径0.6cmの穴があいている。一方の面に外周にはば平行して2条の沈線によって模様が描かれている。中央部に少々の剥離があるが完形で出土した。

拓影土器 (第13図)

出土土器片は数多くみられたが、ここに取りあげた以外は細片であり、且つ又無文のものが大部分であった。ここに取りあげた17片の土器を説明してみると、次のような。

(1)は第1号住居址、(2)～(4)は第2号住居址、(5)～(17)は第3号住居址である。弥生時代後期に限定されており、文様自体にも大きな差違はなく、色調は殆んど灰褐色と赤褐色であるが、灰白色のものもあった。

(1)は櫛描きによる沈線が不規則に配列されている。(2)～(4)は口縁部が漏斗状に



第13図 土器拓影

開く器形を呈し、口縁部から沈線が縦位に垂下している。(5)は口縁部破片であるが、(2)～(4)とは違っている。ただ文様は、大半同じようである。(6)・(12)は櫛描きの沈線であり、沈線の状態は円周の一端に類似しているようにみえる。(7)～(10)は櫛描波状文であり、条や波長はまちまちであった。(13)・(14)・(15)は櫛描きによる沈線が擦痕状に走っていた。(19)は櫛描波状文が10数条、束になつて横位に走っており、その波長は大きかった。(16)は沈線が数条、一束になって垂下していた。

(小池政美)

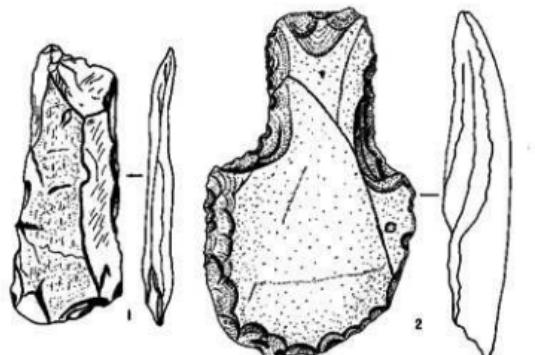
第3節 石 器

打製石斧 第13図(1)・(3)・(5)

(1)は表面採集によるもので、刃部がやや広い撥形をしており、全長14.5cm、厚さ1.4cmを計る。(3)・(5)は第2号住居址発掘中（第2層中）に出土したもので(3)は両側面及び刃部に調整を加えて整形している。全長13.5cm、最大厚3cmの短冊形である。(5)は刃部に丸味をつけ石器全面に調整痕を見ることができるが上部が欠損している。

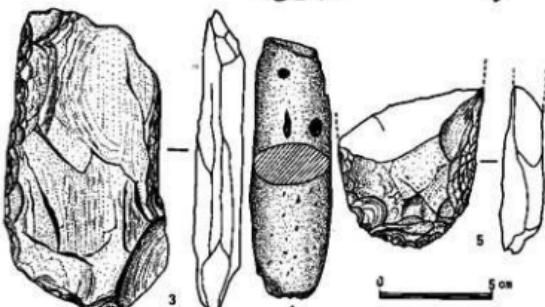
棒状石斧第14図(4)

第2号住居址発掘中の出土、断面長楕円形の自然石を利用し、先端は使用痕を見ることができる。上部は折れ欠損している。



有肩石斧第14図(2)

第2号住居址床面上からの出土で、住居址に直結する遺物である。基部を一段と細く作り、有柄の石斧とも見なし得る石器で、鍬のごとく農具に使用したものであろうか。自然面をたくみに利用し、



第14図 石器実測図

刀部、肩部共に細かく調整を加え整形している。石質は砂岩である。

(柴登巳夫)

第3節 中近世の遺物 (図版7、8、9)

猿樂遺跡からは、縄文中期、弥生式後期、土師、須恵器、灰釉陶器の外に、桃山～江戸時代～明治に至る陶器及び磁器が多く出土した。

ここでは、代表的な遺物について述べて参考に供したい。(1)は鉄釉壺、磁器、産地は瀬戸、明治初年頃のもの。(2)は、染付中皿、産地は瀬戸、江戸末期。(3)は、ゆきひら、陶器産地は瀬戸、江戸末期。(4)は、湯呑、陶器、産地は瀬戸、江戸後期。(5)は、徳利、陶器、産地は瀬戸、江戸中期。(6)は、呉須恵の皿、陶器、産地は瀬戸、江戸中期。(7)は、鉄釉碗、陶器、産地は瀬戸、江戸中期。(8)は、皿、陶器、産地は瀬戸、江戸期。(9)は、鉢、器形筒形、灰釉陶器、産地は美濃、江戸期。(10)は、鉄釉の蓋、陶器、産地は美濃の窯、江戸期。(11)は、器形不明、青磁、産地は瀬戸、江戸期。(12)は、碗、酸化コバルト、陶器、産地は瀬戸、江戸期。(13)は、ぐい呑茶碗、灰釉陶器、産地は瀬戸、江戸期。(14)は、摺鉢、陶器、産地は美濃系、江戸期。(15)は、湯呑茶碗、灰釉陶器、産地は瀬戸、江戸期。(16)は、器形不明、鉄釉陶器、産地は瀬戸、江戸期。(17)は、器形不明、陶器、産地は瀬戸、江戸期。(18)は、大鉢、陶器、産地は美濃、江戸期。(19)は、ゆきひら、陶器、産地は瀬戸、江戸末期。(20)は、鉄釉碗、陶器、産地瀬戸、江戸期。(21)は、天目茶碗、陶器、産地は瀬戸、江戸～桃山。(22)は皿、陶器、産地は美濃？、江戸～桃山時代。

(友野良一)

第V章 所 見

猿樂遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町木下字猿樂地籍に所在する。遺跡の環境は、天竜川の氾濫原を眼下に見おろす右岸段丘上にある。同じ段丘上北辺には、南城・北城・上の林・藤山・中山、南側段丘上には、南垣外・丸山・天王森・上人塚・垣外・天白、また天竜川の左岸段丘上には、北垣外・大原・上金・矢田尻等箕輪遺跡を取囲むように分布する。これ等の遺跡は、繩文中期・弥生・古墳・平安の各期を複合した遺跡である。上伊那の遺跡の複合立地は、繩文・弥生・土師の複合は50%、繩文のみ28%、土師・平安陶器20%、その他2%と云う比率で分布する。

上伊那の弥生式遺跡の占地を見ると、天竜川の段丘上には、条痕文の遺物を出土する遺跡は、中川村片桐刈谷原・柏原、箕輪町沢北溝、伊那市東春近暗ヶ入、山麓より流れる支流河川の出口や、扇状地の中間段丘に所有する遺跡は、駒ヶ根市養命酒駒ヶ根工場内遺跡、同市南割北方遺跡からは、水神平土器片に長野県で初めてのモミ痕が発見された。このことは、弥生式前期後半に信濃でも米作がこの期に行われたことを立証する貴重な資料となった。上伊那にあっては、水神平系の遺跡の数も近年開発事業によって数多くの遺跡が発見されたが、今迄確実な遺構は発見されていない。また、上伊那にあっては、中期の遺跡の数は少ないが、そのうち、南城・上の林・御室田等の諸遺跡は箕輪遺跡を中心として分布しているということは、天竜川の氾濫原と、中期の一般的農耕文化が広く伝播し、それぞれの各地で特有の土器分布圏が成立することに示されるよう、農耕社会が各地域に定着するなかで伝統の形成と拡散が進行していった。西日本の地域では爆発的増大がなされ、原野の中心のみではなく、山間部や高原にまで拡大されていった。西日本にあっては前期の集落の中でたくわえられた原動力が、中期の立地に新しい遺跡発展を見るのであるが、天竜川水系においては、一時期おくれて自然堤防による新農耕地造成が中期に発達した箕輪遺跡等によって可耕になり、やがて、水の制御や、湿地を乾かすことなど灌溉用水を引く技術などの経験の蓄積ができる様になり、後期には、氾濫原より段丘上や河川添の段丘に住居を移し高度の技術をもって、水稻と陸稲を合せ行える農耕經營に移行していくものと考えられる。猿樂遺跡もこうした背景のもとに立地しているものと思う。

遺構 調査された住居址は3軒である。そのうち第1号・第3号住居址は完掘できなかった。調査以外の箇所にも數軒の住居址が所在することが分布調査で知られている。発掘された住居址のプランは隅丸長方形的一般的なものである。その大きさは長軸の方向5.3~4.7m、短軸は5.2~4.1m内外である。上伊那地方では、この種の大きさが一般的である。主軸の方向は東西であるが、一致してはいない。主柱穴は第1、2号住は4柱、第3号住は完掘できなかったが4柱と考えてよからう。柱穴の形は全部隋円形であった。主柱穴の形は1住居址全部隋円形のものと、隋円に円形が混じるものと、円形のみのものとがある。猿樂遺跡は南に全部隋形の形式である。主柱穴以外に住居内にピットがある。第1号と第3号住居址には、主軸の方向に向かって柱間中間等間隔に径3~4箇8~13cmに並列する浅い穴は、間仕切ではないかと言う説、作業台ではないかなどの諸説があるが、今迄決定的なものではない。第1・2号住居址の両側壁外30cm~1mの箇所に直径20~40cm深さ7cm~20cmのピットが南北に直列に並んでいることである。この事実は、住居の復原を試みてみると、屋根の外側位置に当るので、あるいは極の穴とも考えられるが、それでも西側の一部のみに存するところから、極穴とも断定できない。この地方では絶ケ岳方面から吹降ろす西風が強いことと、住居の主軸の方向がこの方向に当ることにより、入口方向の風除け施設かもしれない。季節風の強いこの地方になっては、こうした施設が設けられても当然のように思われる。

3軒の住居址とも埋甕炉をもっている住居址である。床面を掘り凹めた中央に土器を埋た埋甕炉である。その位置は、梁の渡る線の下より東側25~1.2mと一定していないが、この位置が時期に依って規則性をもっていたものか、あるいは建築上に関係するものか、そのほか、柱間のほぼ中間主軸の線上に設けられている事実は問題を含んでいると考えられる。このことは今後の研究にまちたい。

住居址の分布でみると、各住居址間が7~15mの距離にあるところと、ほとんどの住居址が切合っていないところから、猿樂遺跡の弥生集落は一時期であったものと考えられる。

上伊那における弥生式の住居址の発掘は、昭和26年駒ヶ根市東伊那郡孤クボ遺跡が最初で、それ以来、宅地造成や開墾等で調査された住居址は10軒内外であったのが、中央高速道が開設されるに当り、埋蔵文化財の調査が行なわれるにあたり、弥生式後期の住居址89軒を発掘した。また、近年大形の土地改良事業が上伊那各所で行われるにあたり、36軒の住居址が調査された。そのほか、宅地造成工事でも32軒、その他13軒、合計170軒が発掘調査され、上伊那における弥生式文化の概略を知ることができる段階に至った。

柱穴址 本遺跡発見の柱穴址は東西13.5m(約7間)、南北17.5m(約10間)、面積230m²(約70坪)柱穴の本数133本、1本当たりの所有面積は1.77m²(約0.52坪)と密集した柱穴址である。柱穴と柱穴との間隔は南北100~120cm、箇数は1列に13箇内外で、このような列が10列並ぶ。東西は一部通る列もあるが、不規則の場合が多い。また、柱穴間隔も南北に比して10cm内外短くなっている。地盤の状態は、東北に2度30~40分の緩やかな傾斜をなしている。柱穴もそれと同様それにならって傾斜しているので、構造物も、それ相当の意味をもつものであったと考えられる。柱穴の底部はあまり圧力が加わった様子もなく柔らかであるところから、あまり重力の加わらない構造物であったと思われる。こうした遺構の発見例が少ないので早速結論が出ないが、調査中に私に寄せられた御意見を紹介し御教示を賜りたい。本遺跡の地名が猿樂という特殊な地名であるところより、能楽の舞台ではないかと言う説、倉庫ではないかと言う説、農耕の物乾場ではないか等の説がありました。決定的な資料に欠けているので今後資料の増にまちたいと考えている。

土器 復原可能なもの6箇体である。このうち埋甕炉は12図1、3、4でいずれも甕形土器で底部を欠いたものである。文様は櫛描の縦線、12図6は内面に浅い櫛描の波状文が雑然とした形で施文されている。他は浅い櫛描文が主体をなしている。時期は後期前半の終から後期後半にかけてのものと考えられる。

石器 表採によるものと、発掘中に出土したものである。14図1は表採の打製石斧、2は第2号住居址の床面より出土した有肩石斧である。3、5は第2号住居址の覆土中から発見された打製石斧である。後期に入ると急に石器が少くなる傾向が顕著にあらわれる。そのほか土製の紡錘車が発見された。

陶器 本遺跡発見の陶磁器を整理してみると、桃山~江戸初期では、瀬戸天目茶碗、皿、美濃産では皿。江戸中期では、瀬戸産の皿、徳利、碗。江戸期としては、瀬戸窯、鉄釉碗、湯呑茶碗、ぐい呑、灰釉鉢、で美濃産では大鉢、招鉢、鉄釉蓋、灰釉鉢。江戸末期瀬戸産のゆきひら、皿。明治では、瀬戸窯の鉄釉壺等に分類することができる。桃山~江戸初期の天目茶碗は別として、江戸期のものは日用陶器である。

本調査に御協力を賜った方々に心より御礼申上ます。特に陶磁器の分類に当り瀬戸市の宮石宗弘先生に紙上をもって御礼申上ます。

(友野良一)

図 版



遺跡地遠景



遺跡地遠景

圖版 I 遺跡全景



遺構全景



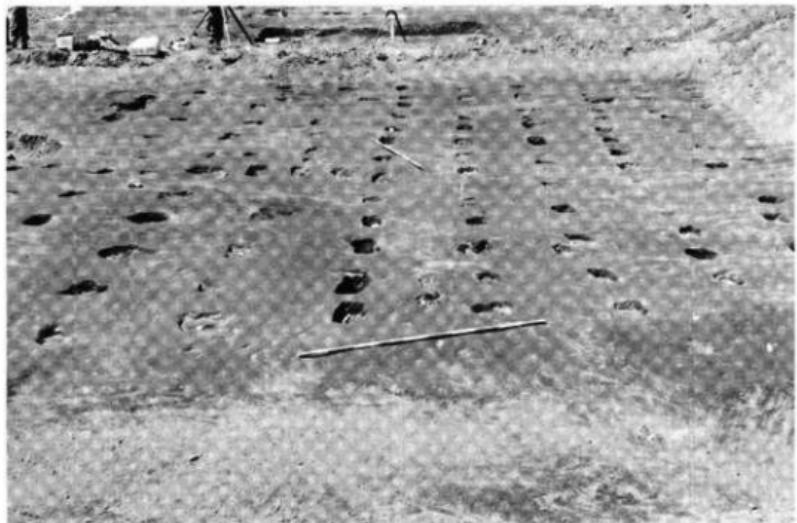
第1号住居址



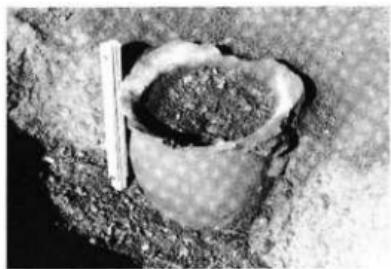
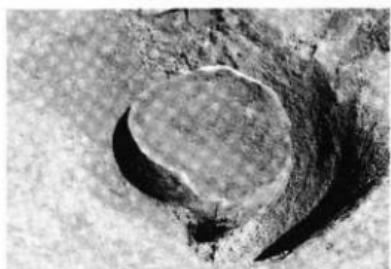
第2号住居址



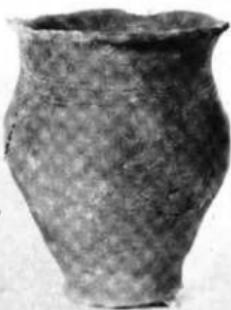
第3号住居址



柱穴址



遗物出土状况



第1号住居址



第1号住居址



第2号住居址



第2号住居址



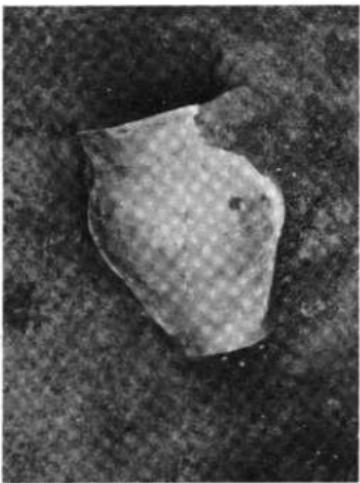
第3号住居址



第3号住居址



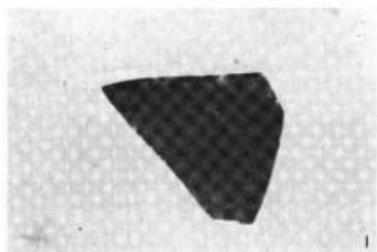
土器出土状況（第2号住居址）



土器出土状況（第1号住居址）



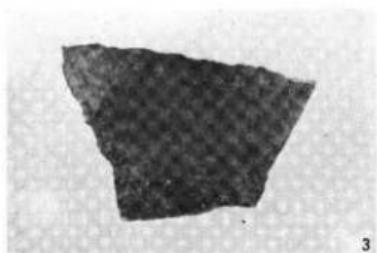
記念撮影



1



2



3



4



5



6

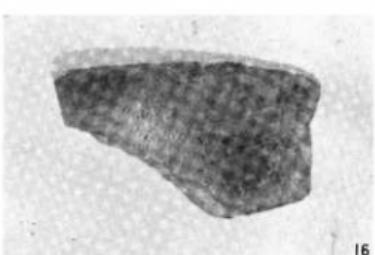
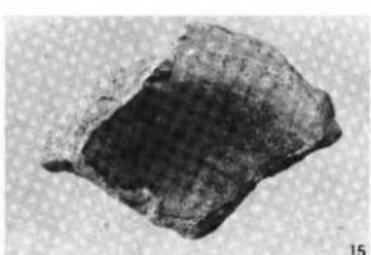
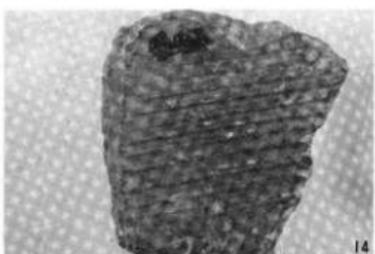
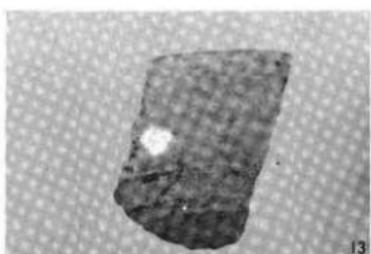
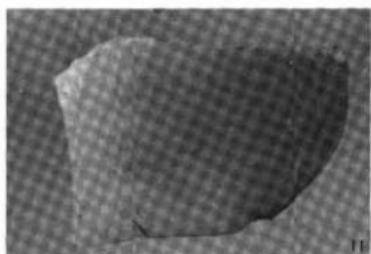


7



8

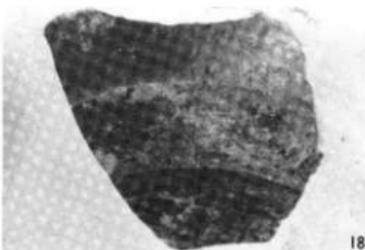
図版7 遺物 (出土陶磁器(その1))



図版8 遺物 (出土陶磁器(その2))



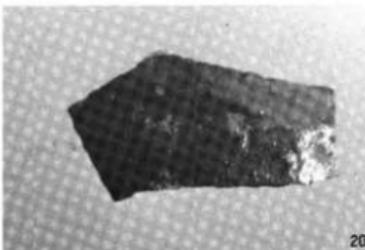
17



18



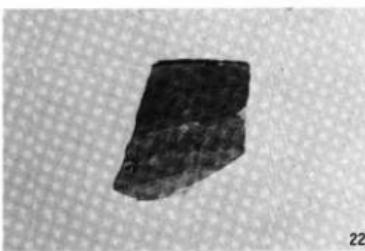
19



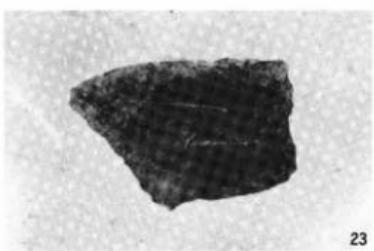
20



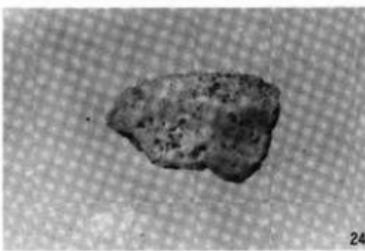
21



22



23



24

図版 9 造物 (出土陶磁器(その 3))

木下猿樂遺跡

～緊急発掘調査報告～

昭和51年1月30日 印刷

昭和51年2月1日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会
南信土地改良事務所

印刷所 伊那市小松総合印刷